

## 当院における血液培養陽性症例の現状と考察

◎黒田 亜里沙<sup>1)</sup>、楠原 瑞貴<sup>1)</sup>、山岸 奈美<sup>1)</sup>、中井 依砂子<sup>1)</sup>、幸福 知己<sup>1)</sup>  
一般財団法人 住友病院<sup>1)</sup>

【はじめに】当院では、2013年より毎日ICD、AST専従薬剤師、臨床検査技師による全血液培養陽性症例を対象としたラウンドを実施している。今回その結果を元に、当院の血液培養陽性症例について考察したので報告する。

【対象と方法】2013年1月から2021年10月の間に血液培養が採取されたのは19,014件存在し、陽性は2,211例であった。その内ラウンドで汚染と判断された236例を除く1,992例を対象とした。外来818例、入院1,174例について比較を行い、またESBL産生菌、AmpC産生菌およびブドウ球菌の検出例に対する考察を行った。

【結果】感染臓器は、外来で尿路315例(43.1%)、肝胆道系195例(26.7%)、呼吸器52例(7.1%)で、入院はFN288例(26.9%)、尿路235例(21.9%)、カテーテル感染167例(15.6%)であった。検出菌は、外来で*E.coli*355例(43.4%)内ESBL58例、*K.pneumoniae*94例(11.5%)、*S.aureus*66例(8.1%)内MRSA14例、入院は*E.coli*296例(25.2%)内ESBL53例、*S.aureus*155例(13.2%)内MRSA59例、CNS126例(10.7%)内MRCNS111例であった。初期抗菌薬は、外来で

CMZ183例(22.4%)、MEPM153例(18.7%)、CTRX124例(15.2%)、入院はCMZ172例(14.7%)、MEPM159例(13.5%)、第4世代セファロスポリン系薬154例(13.1%)であった。全症例中ESBL、AmpC、ブドウ球菌はそれぞれ130例、93例、360例あり、適切な抗菌薬に変更された症例はそれぞれ8例、11例、17例存在した。ESBLは8例がカルバペネム系薬、AmpCは9例が第4世代セファロスポリン系薬、ブドウ球菌は16例がVCMに変更または追加されていた。30日死亡率は、全体で9.8%、ESBL4.6%、AmpC11.8%、ブドウ球菌13.1%であった。

【まとめ】外来と入院では感染臓器および検出菌が異なり、それを考慮した初期抗菌薬が選択されていた。30日死亡率がESBLで低くAmpCやブドウ球菌で高かったのは、感染臓器の違いや初期抗菌薬の選択などが考えられた。今後、質量分析や遺伝子検査を用いて、迅速な同定や耐性を報告し、早期の適切な抗菌薬の使用に繋げることが重要であると考えられる。当日はさらに解析を加えて報告する。

連絡先：06-6443-1261(内線6040)